

---

# Alice of Black Blood

黒猫時計

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「PDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Alice of Black Blood

### 【Zコード】

Z2736Y

### 【作者名】

黒猫時計

### 【あらすじ】

黒崎亞莉栖はゲーム好きな女子高生。その日も今日こそはクリアしようと意気込み、テレビの前で勤しんでいた。努力の甲斐あってか、話題のホラー『アリス・イン・デスゲーム』を、徹夜の末クリアする。しかしそこに表示されたのはコンティニュー画面だった。疑問に思いながらもイエスを選択し。 異形と戦う異世界トリップもの。

残酷表現および流血描写など多數出てきますので、苦手な方はご

注意くださいませ。

暗がりな空間の中、仄かな明かりがちらつきを見せる。

それは黄色であつたり赤であつたり、青であつたりした。

時折目も眩むような閃光を発し、暗転してはまた光り、それを幾度も繰り返す。

様々な色の光を生み出す万華鏡。文明の利器である液晶テレビには、目まぐるしく忙しなく動き回る二人の人間。どちらもその姿勢から女性だと窺える。

その前には、それらは被ひてゐる、上が轉寫を浮かばせる。

同時に音も聞こえた。

金属を打ち鳴らすような音、そして悲鳴と呻き声、何かが倒れる音、爆発音。次から次へと畳み掛けるように連なる音に混じり、力 チヤカチヤという奇怪な音も連続して聞こえてくる。

そんな匂い部屋に浮かひ上かるのは、数々のぬぐるみや人形た  
猫であつたり、帽子であつたり、ウサギであつたり。溢れかえる愛  
らしくデフォルメされたものの中には、口端を吊り上げ嗤う不気味  
なものもいて。場の雰囲気と相まって、壊れた遊園地の如く狂氣じ  
みていた。

突如

一際甲高い断末魔の叫びとともに風切り音が鳴り響く。室内は一瞬、赤い光に包まれた。

と同時に、

「よつしゃーーー！」  
アリス倒した！」

声量を抑え、歓喜に震える拳を握るのは一人の少女。右手には黒いコントローラーが握られている。

発光の明滅を繰り返していたディスプレイは、上から垂れる血の表現からやがてエンディングを経て、エンドロールへ。真っ黒の画面に音楽と白文字が流れしていく。

懐中時計にも似た壁掛け時計が指す時刻は現在、深夜一時三十分を回ったところだ。

「ふうー、ようやくクリア出来た。けつこう難しかったなー、『アリス・イン・デスゲーム』。アリスつてばチョー強いし」

その苦労が滲む汗い顔をしながらも、おもむろに手にしたパッケージ。

表紙には真紅のドレスに身を包んだ鎌を持つ妖艶な美女と、血まみれの白ウサギ。そしてナイフ片手にいかにもな悪役面した少女の顔が描かれている。

裏表紙にはでかでかと「アリスを倒せ！ 殺せ！ 首を刈れ！」となんとも物騒な言葉が、これまたナイフ片手に怯える“アリス”らしき少女の絵とともに謳われていた。

CERO Z。十八歳以上対象のホラーアクションRPGだ。

最近流行の据え置き機のソフトで、「不思議の国のアリス」を題材としている。

登場人物名程度しか踏襲されておらず、内容は狂気に囚われた赤の女王が、アリスの首を狙い次々に邪魔者を殺戮していくというものだ。その邪魔者の中には、時に味方も含まれる。

高校生の間でも少なからず話題となつてあり、海外からもその難しさとグロテスクさ、奇抜さから贅否は分かれるが、多少の評価はされている作品だ。

「 にしても……、アリスを殺すのが目的のゲームって……。確かに斬新だと思つけど、ちよつと気が引けるなー。なんせ同名だし……」「……

下から上へと流れていいく画面の文字をボウと見つめながら、少女、黒崎亜莉栖は頬を搔く。

流れるエンディングテーマも、その内容と粗まつてかクリアを祝うような楽しいものでは決してない。

ピアノの旋律は単調の悲しい曲だった。時折聞こえるオルゴールの不協和音が、余計に陰鬱な気分にさせた。

「でも、苦節一ヶ月半……。学校ある日もない日も、徹夜で頑張った甲斐があったよ。ほかのゲームに浮気もしなかつたしね！」

一人しかいない部屋の中、亜莉栖は誰に言つてもなく、まるで自分を褒め称えるかのように何度も頷きを繰り返す。

気付けば、エンドロールは終わりを迎えるとしていた。

最後の文字、エグゼクティブプロデューサーの名が流れていき、制作会社のロゴが表示され

「……ん？」

暗転した画面に表示された文字に、亜莉栖はつい目を壁つ前める。

「あれ、なんで？」

顔に疑問符を浮かべながら画面に向かつて問いかける。何故なら、テレビの液晶には、

Continue? 【Yes】 or 【No】と

表示されていたからだ。

「クリアしたのにコンティニュー? 普通、FinishとかThe Endとかじゃないの?」

しばらくの間呆然と見つめていた亜莉栖だが、画面が切り替わる様子もないことを確認すると、おもむろにカーソルを【Yes】へと合わせた。試しにキャンセルボタンを押しても、なにも反応はない。

ついでにスタートボタンも押してみる。しかしおかしさにセーブ画面すら表示されない。

小首を傾げ訝しがりながらも、亜莉栖は隠し要素でもあるのかと考え、意を決して「ノントローク」の決定ボタンを押した。すると、

『キヤハハハハハハ!!』

「ツ?! な、なに……」

途端に聞こえた音にビクつき身を強張らせる亜莉栖。それは設定した音量よりも遙かに大きく響いた。

女の嗤う声に次ぎ、嘲笑する低い男の声が混じると再び画面は音もなく暗転し……それは突然に起じった。

ブウウウン。

と微かな照明となつてていたテレビは電源が勝手に落ち、光を失つた室内が闇に染まると同時であった。

亜莉栖の視界がぐにゃりと歪む。

今までに見たことのない光景。それは確かに眼に視えた。空間が、まるで雑巾でも絞つたかのような動きでつねり、螺旋を描きながら回転しているような錯覚に陥る。

「うう……あもあ、悪い……」

それに伴い、鮮やかなまでに強烈に叩き込まれた不快感。激しい立ち眩みのような、乗り物酔いにも似た感覚は、亞莉栖の思考を麻痺させた。口元を手で押さえ、胃の内容物の逆流を抑え込むかのように必死で嘔吐くのを我慢する。

世界がグルグルと回転し朦朧とする意識の中、伸ばした手が触れたもの……。

幽かに残る意識の欠片が最後に見たものは、ベッドの上の、白い

……嗤う、ウサギのぬいぐるみだつた。

## 01 黒い「いつわ」は変態男？

混濁する意識の中、微かに聞こえた水のせせり。聴覚に次いで感じた鼻をつく香りは、縁の青臭さと少し、土臭かつた。

「う……ん……」

まるで意識を誰かに持ち上げられるかのように、少女、黒崎亞莉栖は目を覚ます。

重い瞼に隠れていた墨色をした瞳が、朧気ながらに世界を映し出すと、同時に意識の覚醒が始まった。

……妙に体が重い。体重、少し増えたかな？

そんな他愛もないことを考えながらも上体をゆっくりと起こした。そして焦点定まらぬ眼のまま、ぐるりと辺りを見渡す。

「 いつっ？！」

知らぬ間に頭でもぶつけたのだろうか。顔を顰めながらこめかみに手を当てるど、まるで古いテレビのようにザラザラとチラつく視界を払拭するように軽く頭を振った。

「…………？」

ぼやける視界はやがて正常を取り戻し、改めて見る自分の周囲はどうを見渡しても木、木、木。

満ち溢れるマイナスイオンと、肺を一杯に満たす縁の匂いとが、ここが森の中だということを自覚させる。

田覚めの前にも聞こえた水音に振り返ると、背後には滾々と湧き

出る清らかな泉。そしてその周囲には、水差しで水を注ぐかのように、優しく流れ落ちる幾筋もの滝。

あまり大きくはないが、水面が煌くその様は、場の雰囲気と相まって自然の神秘さを湛えていた。

氣怠そうに天を仰ぎ見た亞莉栖は、木々の合間から微かに漏れる光のシャワーに目を細める。

まさに夢見心地。

甘く響く穏やかな自然のコンチエルトは、亞莉栖を再び眠りの中へと誘おうとしていた。

安らかなひと時への誘惑に身を委ねようと目を閉じて……しかし数瞬の後、亞莉栖はあることに気づく。

「 てか、リリビリ…？」

目を瞠り、自らに起こった現象の把握に努めようとすると、未だに思考が追いついてこない。

神秘的過ぎる場の空氣に、夢か現かも判らないほど毒された脳では、判断出来るはずもなかつた。

呆然とただ目の前に広がる景色を眺めていると ガサツと木の葉を踏みしめる音。次いで木立の影からヌツと黒い影が姿を現す。

「だ、誰……？！」

明らかに緊張と警戒を含んだ声を投げかけながら、衣服が汚れることも厭わずに、亞莉栖は泉の方へと後退る。

一歩一歩近づいてくる不審な影に、引き攣った顔をして動向を目で追つていると、影は木洩れ日の下までやってきてその黒い姿を映し出す。

それを見た瞬間、亞莉栖の動きが一瞬止まった。

啞然とした顔で見つめる先、その人物の頭からつま先まで何度も往復する亞莉栖の黒瞳。

そして、

「へ、へ、変態がいるつー？」

「誰が変態だ！」

驚愕した声に、間断なく返ってきたハスキーボイス。  
それはまるで火をつけたグラスに垂らす、ブランデーのように甘く薫るほど脳を浸潤する響きだった。

しかし亞莉栖はそんなことも気に留めぬまま瞠目する。

中心線よりやや右後ろで縛つた、肩口まである艶やかな黒髪。鮮やか過ぎる深い蒼をしたその瞳。亞莉栖より十センチは高い身長を包むのは、どこかのお屋敷に従事する執事のような燕尾の礼服。まるで漫画やアニメ、ゲームの世界からそのまま引っ張ってきたかのような美青年だった。

黒髪碧眼をした中性的顔立ちの青年は、目つき鋭いままに呆れたよつなため息を漏らすと、そのまま樹木に背もたれた。

「お前は、『アリス』か？」

「く……？」

一瞬、亞莉栖の思考がフリーーズする。

普段なら、セーブすらせずに進めた末に、途中でゲームがフリーーズしそうものなら、暴れ馬の如く暴れるのだが……。どうやら今の状況では、亞莉栖の暴走は起きないようだ。

それもそのはず。

名乗ったことのない、ましてや会ったこともない赤の他人に、自分の名前を言い当てられたのだ。

亞莉栖の男に対する不信感は、コニシートページをかいと高めた。

「い、いえ……ち、違う、ま、ま、わよ？」

ゾ緊張のあまり顔が裏返る。

（……やつよ。ソソで返事しようつものない、絶対喰われちやつー。だつてあんな皿つくるんだもんー。断固拒否ー。なんとしたのも誤魔化さないと……。それに、見知らぬ人に名前を教えちやダメだつて、保育園の時にお母さんも保育師さんも隣のおばあちゃんも飼つてた猫にも言われたもんねー。）

悟りぬよつこした顎きの後、男から皿を逸らし、一回つほど縮めるつもつで体を恐縮させる亞莉栖。

男は睨むよつな視線を崩さずジッと少女を見つめている。

（「J、これは……ッ！？」案の定わたしの危険アンテナが注意（CautioN）から警告（Warning）レベルへ戻も上げて警報鳴らし始めてるわー。）

恐々とした様子でチカコと男を見やる亞莉栖。視線が交差するや和や、光の速さで顔を背けた。

（「J、睨んでる、睨んでるよー……。な、なんで？　わたし、なんかしたかな……？」）

「わ、一度聞ねい……。お前は、『アリス』かと聞いていの」

再び訊ねる男の声には、明らかに苛立ちが見て取れるほどの怒氣を孕んでいた。

それに恐れをなした亞莉栖は、無言のまま首を左右に強く振った。

しばらくの沈黙。

男の出方も分からぬ。

ただ空白な時が流れることに、先に耐え切れなくなつたのは亞莉栖の方だった。

「あーもう、まったく！ あんたしつこいのよー。わたしは亞莉栖よ！ 文句でもあるの！！ 分かつたならとつとどどつかに消え

」

「やはりそつか。……いや、聞かなくても解つてたことだな。なぜなら

「ヒイイイーーーー！」

「ん？ 煩い女だ……なんだ？」

「あんた、も、もしかしてストーカー？！」

「人聞きの悪いことを言つた。まあ、お前をストーキングするやつらは他にいるけどな」

亞莉栖はその一言で再び硬直した。

震える声で問いかける。

「ま、まさか、人攫い……？」

「ああ？ つぐづぐ失礼なやつだ。撃ち殺すぞ」

言いながら懷に手を入れた青年は、鈍い光を反射する黒い物体を引き抜いた。

それは亞莉栖もよく見知つている形だつた。見知つているとしても、実際に見たことはない。

青年が手に持つそれはゲームにも頻繁に登場する、現代の火器、拳銃だ。しかも回転式弾倉を持つ、回転式拳銃タイプだつた。

「そ、そんなもの取り出して、一体、ナーチーする気……？ ま、まさか、それでわたしを脅して犯そうとか思つてゐるんじゃないでしょうね？」

「バツ……。オレは女なんぞに興味はないんだ、そんなことするか！」

「やつぱり！ あんた真性の変態じゃない！」

「だれが変態だ、誰が！」

「それよ！」

反論など許さない！ と言わんばかりに、西莉栖は男の頭上をビシッと指した。

先にも発した罵りの言葉。それはそこに“あるもの”を指したことだったのだ。

慄懾な執事然とした風体の青年にはまるで似つかわしくない似合つていないと、いう意味では決してない カジノや怪しいお店、はたまたコスプレでしか使われないようなものが乗つている。

その黒髪と同じ色をしたふわふわの毛で出来たもの。銀のトレイを持つ女性をイメージする一葉のカラシノ口。

男がするにはこたとか勇気がいりそな、けれど青年は『ぐく自然に、まるで生えているかのよう』に身に着けるそれは、黒いつむぎの耳だった。

「『』にこのビニが“変態”なんだ」

「どう考へても、男がするのはおかしいでしょー？！ そんな恥ずかしいもの女だつて進んで身に着けやしないわよ！」

「いちいち煩い女だな。しょうがないだろ。オレは“黒つむぎ”なんだから」

「へ？ 黒、うせぎ……」

「ああ。見れば解るだろ、アリスなんだから」

(……一体なに語りてんのかしら「ハイツ。ていうか、なに初対面の男とこんなに楽しそうに話してるわけ自分？ そもそも夢でしょ、これ？ ならわざと田を覚まし……って、あれ？）

亞莉栖はよひやくおかしなことに眞づく。やへ、これは夢のはず。でも耳に聞こえるこの水のせせらぎ、樹葉のざわめき。この上ないリアリティを伴つて感じる音、土の感触、森の匂い。そして男の艶やかなまでの立ち姿と声。

あちらの世界にでも旅立つたかのように再び果然とする亞莉栖を、男は訝しがりながら見つめている。

「なんだ、現実逃避でもしてるのか？ 無駄だと思つがね」

視界にチラつく男の姿。なにやら呆れたよつに肩を竦めているようだつた。

「ねえ」

「ん、なんだ」

「それつて……本物？」

呆けたまま、視線は再びうさぎ耳に釘付けになる。

そんなことしか考えられないほど、今の亞莉栖はだいぶキテいるようだつた。

「えつ？！ いや、まあ、その、なんだ。本物に近い……本物だ」

「取れるの？」

「取れん！ 断じて取れん。黒つさぎの耳が取れるだなんて、はは、面白い冗談だ」

「ねえ」

「なんだ」

「動搖、してない」

先ほどの余裕とは打って変わったように、黒つわわは明らかに焦りを見せていく。

顔を引き攣らせ無理な作り笑顔をしながら、あたふたと可笑しながらジェスチャーを繰り返す。

「し、してなこと。黒つわわが動搖？　は、そんなものの童謡にも書かれてない事実無根の虚言だよ」

「……動搖と童謡を掛けたの？　あんまり面白くないね」

「そんなつもりは……ない」

仄かに頬を朱に染めて、青年は恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「うへ、そんなことはどうでもこいんだよ。」

ハツとした青年は声を荒げ、煩わしそうに早足で亞莉栖の元へと歩み寄る。

ビクシと一瞬肩を震わせた亞莉栖は反射的にさりげに後退り、

「えつ？ て、わあつー。」

「バシヤツ！ と飛沫を上げながら、泉の中へと背中からダイブした。

「なにしてんだ、お前？ …… 水浴びでもしたかったのか？」

絶えず気泡が浮き出る泉の一矢を見つめながら、青年は渋然として立ち止まる。

少しして、気泡が小さくなつてみると、そこに茶色の影が浮かび上がる。

ザバツ と盛大な音を出しながら飛び出でてきた少女は、空氣を求める魚のよつともがきながら泉の縁につかまつた。

「ゲホッゲホッ！ ふ、深い！ ちょっと、助けて、って、ばー。」

ヘルプを叫ぶ少女に冷ややかな視線を注ぎながらも、小さく息をつき、青年は肩を竦めながら再び歩を進めた。

亞莉栖の前までやつてくると膝を曲げ、手を差し出し、扇を扇ぐ水に洗われた少女の手を掴む。

まるで女性のように華奢な体つきながらも、どうにかそんな力が備

わってこぬのかと躊躇に思つほどの勢いで、亞莉栖は泉から弓を上げられる。

「あ、ありがと。助かったわ」

地に座り込み肩で息をし、焦りから乱れた呼吸を整えるよう亞莉栖は深い呼吸を繰り返す。

やがて心拍数が落ち着き出すと、今度は水に濡れ、重くなつた栗色の長い髪をおもむろに絞り始めた。

「マジ焦つた……し、死ぬかと思つた……夢の癖してなんでこんな田にあわなきやなんないのよ……」

絞るたびに落ちる雫を眺めながら、ぶつぶつと文句を垂れる。そこへ割り込む青年の声。

「だから、夢じやないって言つてるだろ。まつたく、なんでいつも“アリス”はいつもいつも物分りが悪い奴ばかりなんだ……」

聞こえていないのが、今度は手で髪を梳き流れを整え始める亞莉栖。

そんな少女に対し疲れた風に肩を落とす青年に、亞莉栖は弾かれるように振り向くと怪訝な顔をして訊ねる。

「だいたい、なんであんたわたしの名前知つてんのよー。そもそも、人の名前勝手に呼んでおいて自分は名乗らないなんて、執事みたいな格好しておいて失礼なんじゃないの?ー」

「ん? ああ……まあ、それもそつか」

納得したように頷くと、つい耳の男は一つ咳払いをし

「名乗るのが遅れた、オレの名前はグリ　　」

胸に手を当ててそこまで口元にして、一礼しうつとして不意に言葉を遮られる。

「いや、別に知ったところで何にもなんないし。どうせ夢なんだから」

……聞いておいて適當なことをぬかす。

そんな亞莉栖に田を細め、ある衝動から戦慄く体を必死に我慢しているように見える黒いさだ。

「……殺つてしまつては元も子もないと、顔を引きつらせながらも一呼吸置いた。

「夢？　なに言つてんださつきから」

「だから夢よ。まさかあんた見たことないの？」

「いや、あるが……。これは夢じゃない」

「夢よ！　夢に決まつてるじゃない。こんな変態が出てくる悪夢みたいなの、夢以外に考えられないわ！」

「……悪夢はこれからなんだけどな……。じゃあ、頬でも抓つてみるよ」

「あー言われなくとも抓るわよ！　まつたぐ、こんな原始的な夢覚ましを、高校生にもなつてやる」となるなんて

「めかみに手をやる青年の大事そうな一言を完全にスルーし、文句を言いながらも亞莉栖は頬を指で挟んだ。

「夢なんだから、痛いわけないでしょー」

語尾を殊更のよつに強調し、思いつきりそれを引っ張る。柔らかそうな白い頬はマシュマロのよつに伸び、

「こつた——ツ——..」

泉の広場に亞莉栖の絶叫が木霊した。

「な、なんで？！ ねえ、なんで痛いのよつー？」

「知らねえよ。でも分かつただろ？ ここは夢じゃない、現実なんだ。いいかげん受け止めろよ」

ジンジンと痺れ少し赤くなつた頬を擦りながら、亞莉栖は涙目で黒服を見上げる。

蒼く澄んだ空がなんの感情もなく、ただ自分を見下ろしていた。最後の審判を言い渡されたかのよつに、亞莉栖の思考が働くことをやめる。だが、それは一瞬のことだった。我に返つた亞莉栖は、それに抗うかのよつに再び口を動かす。

「そんなのいやよー……そつよ、きつとまた眠りに就けばいいんだわ」

「今度のアリスは騒々しいな」

「ちよつとあんた！」

「な、なんだよ」

あまりの剣幕に、大きく仰け反つた黒つわざが応える。

「子守唄でも歌いなさいよ」

「なんでおれがそんなこと」

「ゴチャゴチャ煩い！ 変態うさぎの癖に！」

「変態は余計だ！ つうか、あんまテカイ声を出すんじゃねえよー。」

ヤツらに気づかれるだろうが！」

キキキキキキキキキキキキッ……ギギッ。

それは青年の怒声と重なるよつに響いた。

いかゞともなく匂に未だ奇怪な音は 一瞬で歳年の縛りは

樹葉のざわめきは一層の強まりを見せた。

「は、なに? 今の…………曲…………?」

「このバカ女……、だから言つたるうが」

大正十二年九月三十日

今まで、まだどこか丸みを帯びていた青年の田つきが、その一瞬で刺々しいまでの、殺意すら感じさせるものへと変貌したことには、アリ栖は戸惑いを隠せない。

唾を飲み込む音に混じり、梢が湧しく揺れる音が更に大きさを増していく。それと同時に迫り来る“何か”的気配。

急ぐぞ」

「逃げるんだよ！ 嘔われたいのか」「

言いながら、地面にへたり込む亞莉栖の手を無理やりとる青年は、

「ちょ、ちょつと待つてよ。いつたいどこ連れて  
一先ず公爵のところまでだ。死にたくなればついてこい。」

言われるままに手を引かれ、言い知れぬ恐怖に押されるよう、アリ栖は暗い森の中へと駆け出す。

泉の畔にただ一つ、騒つ……つわわのぬいぐるみを残して。

木々のざわめきに肌が粟立つ。

霧が立ち込めてきたそんな不気味な森の中、道なき道を一人はひた走る。

「はあ……はあ……はつ……はあ……はあ……」

その一つの背中を追つ、なにかに追い着かれぬよう、縋れそつになる足を前へ踏み出し、アリ栖も必死で青年についていく。

「大丈夫か？」

走り始めておよそ五分。

全力に近いスピードで駆けているため息切れしているアリ栖。それに比べ、うさ耳の青年は息一つ乱さずに、振り返り声をかけるほどの余裕がある。

中学では陸上もやつていたこともあるアリ栖には、体力に少しは自信があつたのだが……。湿る腐葉土はぬかるみ、非常に走り難いことこの上ない。

何度も滑りそうになりながらも、それを許さないと急かす手を引く男の腕。

訳も分からぬままに走られ、次第に高まってきた苛立ちの張り付いて剥がれない表情のまま、アリ栖は青年に問いかけた。

「だい、じょつぶ……。はあ、はあ……てか、いつたい、どこまで  
……走れば、いいのよ……！」

「まだ半分も来ていない。死にたくなければ全力で逃げ切れ」

さらりと一言、途中棄権したくなるようなことを言つてのける青年の顔にも、本当は余裕なんてなことか、今の亞莉栖に気づけるはずもなかつた。

「いつたい、何から、逃げりつて、血のよ……。わけが……分か  
んないわ」

「」のままじや追いつかれる、もう少しスピード上げる。喋つて  
ると舌噛むから少し黙れ

（「」これ以上速度上げられたら、間違いなく死んじゃうわよー  
なに考へてんのよ、」の変態つせわせ つて）

思考するや否や、車がギアチョンジするかの如く青年の走行速度  
が一段と増した。

木々が左右に流れていぐ。まるで青年を避けるかのよつ。  
飛んでいるような浮遊感をも生み出すあまりの速さに、亞莉栖は  
自然に目を瞑る。

それがなぜかは分からない。

手を引かれている安心感か、それとも青年を信じられる者だと無  
意識的に直感したからだろうか。

しかし、彼に身を委ねて……亞莉栖は後悔する「」となる。

「えッ？！ つて、ウキヤアアアーー！」

張り出した太い木の根に躡いて、飛ぶよつて転倒してしまつたの

だ。

今度は顔面から地面にダイブした亞莉栖。数瞬のうち顔を上げ、地面に彫られた自分のマスクに視線を落とす。

下が湿氣を多量に含んだ柔らかい腐葉土だったため、顔に大した傷は負わなかつたが……。

ギッと怒りをその目で宿して、自分より数歩離れた位置で立ち止まる青年を睨みつけた。

「いつたいわね！ 一体どこ見て走つてんのよー。」

「知るかよバカ。お前がよそ見してるからだろ。」

「違うわよ！ 田閉じてただけでしょ。」

「あの走行中に田を閉じる奴がどこにいるんだよ。」

「あーもうー あんたのこと、多少でも信じたわたしが馬鹿だったわ。」

「いいから早く立てよ、こんなことじつはやないんだ。本当に追いつか ッ？！」

近づき、再び手を差し出した青年の動きがピタリと止まる。その顔には驚愕の一文字。戦慄の微振動が青年を揺らす。

「ん？ どうしたの、そんなに驚いて……？」

その視線の先を、亞莉栖は振り返り田で追つてみた。

背後にあつた太い木の根元、そこから幹を伝いさらに上へ。怪しくまるで手招くようにそよぐ樹葉の一部に、影とも取れぬ血のよう

に真つ赤な霧状のシルエットが浮かび上がつている。

「んな、なに、あれ……？」

『キキキキキキッ、ギッギッ、ギッ』

先ほど聞いた奇怪な音の正体。

それは鋭い鉤爪状の腕を持ち、蛇のような体、そして竜にも似た拉げた頭をした四足の異形だった。体長は優に人間の五倍ほどはあるだろう。

背には蝙蝠のような羽、そして両の手には先端に向かつて鉤状に曲がる、奇妙な形をした剣を携えている。

「チツ、追いつかれたか」

言ひながら、亞莉栖を庇うようにしてその前に立つ青年。無言のまま、スッと音もなく懐へ手を入れると、先に取り出した黒塗りの回転式拳銃を左手に構える。

「ね、ねえつたら。あの気持ちの悪い生き物、な、なんなのよ」

不定期に実体を持つては不定形な霧へと都度、姿を変える赤い霧。得体の知れない生物に、あまりの恐怖から慄く亞莉栖に対し、  
「動くなよ。頭潰してやるから」とも、ヤツは体内器官で空氣の流れを感じ、獲物の位置を特定することが出来る。真っ先に襲われたくなければ息も殺してろ」

青年は鋭い眼光で“敵”を見据えたまま、後ろの少女へキツく注意を促す。

（そんなこと言われたって……ッ！ なに？ なんなの？ 何が起  
じってるの？ じいには一体どこのよーー！）

言われたとおりに息を止め、指先一つも動かさないままに亞莉栖は青年の背中をただ見つめた。

突如、異形は鎌首をもたげる。

そして、瞬間 青年は駆け出した。

「 いじだ、化物」

挑発するよつに発した声に、異形は鋭く反応する。まるで蛇がうねりながら進むよつに宙を這いずり、血の霧散する頭を振り乱す。

と、誘導するよつに蛇行していた黒いうさ耳が屈んだと思つた刹

那 青年は忽然とその姿を消していった。

異形も意外だつたようで、面食らつたように辺りを見回し、その場で右往左往を繰り返す。

（え？ さ、消えた……？ ま、まさか わたしを置いて……逃げ、た……？）

自分を生贊にでもするつもりなのか、と恐怖に顔を引き攣らせる。声も出せない息苦しい状況の中、亞莉栖は心の中で怨嗟を叫んだ。

（あの変態黒いうさ耳……）

と次の瞬間、

「勿体無いから、こいつはあまり使いたくないんだけどな……」

頭上から聞こえた男の声。視線だけを空へと投げた亞莉栖はその姿を認める。

あの一瞬で青年は上空へ飛び、姿をくらまし、異形の真上を取つていた。

幽かな霧に朧げに光る拳銃を構え、狙うのは異形の首筋。赤い霧

状のただ一点、実体を持つ瞬間に浮かび上がる黒点になつてゐる部分だ。

声に反応し見上げる化物。点の位置が僅かにずれる。それと同時に構えた一本の曲刀。

チツと再び舌を打ち鳴らしたのを合図のように、青年は体を半身捻り、近場の梢を蹴つて推進力を得る。しなやかな枝はバネのようになります反動を生み出した。

化物と相対する距離、およそ五メートル。

何度も枝を蹴り、攪乱するように幾筋もの軌道を描く青年の跳躍は、やがて五芒星を描いたところで跳ねた最後の飛躍により、その距離を一気に縮めた。

交差する異形と青年。

赤の霧が実体となつた瞬間 ガアアアーンと、けたたましい銃声を森に響かせ火を噴いた銃口から、至近距離で放たれた青白い弾丸は狙いを過たず、ピンポイントで異形の黒点を打ち抜いた。

「やつた、の？」

その瞬間を目にし安堵したのか、回転しながら着地した青年の背中に向かつて亞莉栖は問い合わせる。

青年は銃を仕舞いながら顔だけをそちらへ向けて、その最期を確認した。

「たぶんな

「いや、たぶんて……あつ」

視界に入る首の折れた赤い影は、次第にその体を空氣に溶け込ませてゆく。

徐々に消えていくその姿。

やがて完全に霧散し消失した現場には、バラのようないい血溜ま

りが残されていた。

「……「ひつぶ」

直後、唐突に亞莉栖の鼻腔を突いたのは、辺りに立ち込められた血液の臭いだつた。

容易に味の想像がつくような、嗅ぎたくもないものを無理やり鼻にぶち込まれたように、強烈に届く濃厚な鉄の臭い。

ホラーゲームはまあ好きだ。スプラッターやスリラー映画もたまに見る。

けれど、実際そいつた現場にいたとしたら、誰だつて「ひつぶ」た反応になるだろ？

……狂気に心を支配されていなければ 。

以前にもあつたような嘔吐きにも似た不快感に身悶えながら、落ち着くまでのしばらくの間、亞莉栖はその場に蹲つていた。

「立てるか？」

青年に問われ、亞莉栖は頷くことで返事とした。  
少し休み不快な気分は幾分かマシになりはしたものの、しかし辺りに立ち込める血臭はいまだ晴れず、亞莉栖は嫌そうに顔を顰めて青年を見返す。

「ねえ、といひでさつきの怪物はなんだつたの？」  
「気になるのか？」

「当たり前じやない。訳もわからず襲われて、危うく殺されそうになつたんだから」

「……まあ、それもそうだな」  
「もしかして、あれがさつき言つてた、わたしを『ストーキング』するやつ？」

怯えた表情で訊ねる亞莉栖に、青年はこくりと頷いた。

「その一つに過ぎないが……。さつきのヤツは『ジャバウォック』と言つて」  
「えつ……あれば、ジャバウォックなの？」  
「ん？ なんだ、知つてるのか？」

意外そうな顔をして青年は問い返す。

亞莉栖はそれに愕然と頷くと、しばしの間、思考に入る

。

それは幼き日に、耳にたゞが出来るほどよく読み聞かせられた、

童話に登場する名前だつた。

亞莉栖の両親は大のルイス＝キャロルファンで、それは娘に童話の主人公である「アリス」と同じ名前をつけた所からも垣間見えるだろう。

本当は「アリス」とカナ表記にしたかったようだが、生糞の日本人なのにそれは少しおかしいだろうと思い直し、亞莉栖が生まれる直前になつて、急遽漢字表記に変更したそうだ。

という話を、亞莉栖は小学生のころに母親から聞かされた。

そしてジャバウォックは、その童話の一つ、『鏡の国のアリス』にその名が登場する。

### 「ジャバウォックの詩」

この詩では、ジャバウォックと呼ばれる正体不明の怪物が、名もない勇者によつて打ち倒されるという事件が、かばん語と呼ばれる多数のナンセンスな単語による叙事詩という形で描写されている。ジョン・テニエルによる挿絵では、ジャバウォックに立ち向かう名のない勇者は少女の姿をしており、一般的にそれがアリスであるという解釈もなされている。

そういえば似たようなモンスターが、「アリス・イン・デスゲーム」にも出てきたな、と亞莉栖は記憶の断片から思い起こす。しかしそのゲームでは味方だったのだが……。

おかしいな、と思いながら、熱でも発しそうなくらい熟考する亞莉栖に、黒うさぎは横から言葉を付け足した。

「といつても、ヤツは影なんだがな」

「……影?」

言葉に振り向き、亞莉栖は小首を傾げる。

たしかにほほ霧状で、時たま実体とはなつていたが、それらしい実体ではなかつた。

「どうこう」と?

「それは……。というか、お前平氣なのか?」

「なにが?」

突然問われた言葉の意味が分からず、亞莉栖はキヨトン顔で青年に聞き返す。

「いや、ヤツの血の臭いだよ」

「……あー、やつ言えれば……。つん、大分慣れてきたみたい」

先ほどは不快でしようがなかつた場の臭いも、長考したおかげか、はたまた嗅覚がイカれたのか、そこまで気にならなくなつてきていた。

しかしそんなアリスに怪訝な視線を投げかけるのは他でもない、訊ねた黒づさぎだった。

……普通の人間が しかもここへ来たばかりの“アリス”が これだけの短時間での臭いに慣れる筈がない。これはもしかすると

不思議そうな顔をして自分を見返すまだあどけなさを残す少女に、青年はある一つの可能性を見出した。

「まあいい。次が来る前にここを離れよ」

「えつ、もう行くの」

「休んで楽になつたんだろう? やつらは血を回収する習性があるんだ。チントラしてると、困まれるや。それにだ

「え?」

黒つわわせ亞莉栖の姿を指差した。

「她的格好どうにかしら」

言われて自身の姿を確認すると、今まで混乱していたため格好など気にしていなかつたが、半袖の白ティーシャツに下は黒ジャージとこう出で立ちだつたことに初めて気づく。

しかも今までの行動により、原色を留めていないほどに泥に塗れてしまつていた。

脳裏を掠めた記憶。

それにより意識がなくなる前に、ゲームをやつていた時のままの格好であることを気づかされる。

そしてふと思ひ出す。最近読んだ小説に、異世界トリップという言葉があつたことを……。

それは何かの拍子に、自分がいた世界とはまるで違うパラレルワールドに迷い込んだり、はたまた何者かに召喚されたり、偶発的に飛ばされたりする現象だ。

「不思議の国のアリス」も、たぶんそつなんだらつなー。と暢気に考へていたのも束の間。

ハツとした亞莉栖は泥だらけの手で掴みかからんとする勢いのまま、青年に激しく詰め寄つた。

「うあつ？！ なんだよ汚ねえな。泥がつぐだらうが、はな」

「ねえ！ これつて、夢じやないの」

「あ？ だからさつときからねつ言つだらつ」

途端、亞莉栖の動きが硬直する。

黒つわわせそんな亞莉栖を余所に、服が汚れないようそれとなく離れた。

「な、なんてことなの……まさか、本当に異世界トリップ？　わたしが、しちゃつたつていつの……？」

訳の分からぬことをぶつぶつと口にしながら震えるアリスを、青年はジッと眺めている。

その眼差しはどこか品定めしているよりも見え、しかし亞莉栖はその視線に気づく様子もない。

「あんた、さつきからわたしのこと、『アリス』って呼ぶけど……。もしかして、アリスってあのアリス？」

「？　何を言いたいのかいまいちよく解らんが、アリスは『アリス』しかないだろ？」

「……それで、さつきのがジャバウォックって事は……ここが、まさかワンドーランド……？」

「比べればなかなか物分りがいいな。今までのやつらはそれを理解する前にたいてい死んだのにな」

「……えつ？　それってどういう」

「ほら、話は公爵のところへ戻つてからだ。さつさと森を抜けるぞ」

疑問の言葉は途中で遮られ、再び手を握られる。

あれだけ近づくのを躊躇つていたにもかかわらず、黒うさぎは泥に塗れた亞莉栖の手をしっかりと握り締めた。

疑問はひとまず胸の奥にしまい込み、再び走り出した青年に手を引かれながら、血臭の濃くなる怪しい森を、亞莉栖は一人で駆け抜けた。

しばらく走り、今度は違う森に入ったことを亞莉栖はまずと認識する。

「なに、この気持ちの悪いところ

亞莉栖の目の前に広がる光景。

それは、樹皮にまるで人面を彫りこんだよつたような奇怪な木々の生い茂る、氣色の悪い低木林だった。

「ここは奇怪樹の森だ」

「……って、そのまんまじやない」

「それ以外に名づけようがないだらうへ」

「……まあ、それもそうだけど」

「ここまで来れば血を回収しに来たヤツに見つかることはないしな、普通に歩いていくか」

ちょうど森の中ほどに差し掛かったところだらうか。

亞莉栖に振り向いた黒つわきは、安全を確認すると繋いでいた手をそつと離した。

見返す亞莉栖は瞳に不安を宿しながら、

「本当に大丈夫なの？」

訊ねると、至つて冷静に青年は答える。

「ジャバウォックは鼻がよくないからな

付き添つよじして歩いていく森の中、亞莉栖はふと思いつく。

（……そういえば、まだこいつの名前知らなかつた……）

「ねえ　」

少し見上げながら隣の男に声をかけると、

「なんだ、腹でも減ったのか。もう少し待つて、ここを抜ければ公爵の城だからな。なんならそいらに生えてるキノコでも食べればいい」

「つて、なに一人で勝手に解釈してんのよー。」

「腹が減ったんじゃないのか？」

「違うわよ！　ただ、あなたの名前を聞きそびれてたから聞いつて思つただけでしょ」

お腹を空かせてる子、という不名誉なレッテルを勝手に貼られそうになり、亞莉栖は不機嫌極まりないといった風にむくれつ一面を顕にする。

そんな亞莉栖に対し、黒つさきは一瞬、フツと笑みを零した。それは出会つてから初めて見せた、青年の“優しさ”だったのかもしれない。

子供のように不貞腐れる亞莉栖を横田で一瞥すると、青年は静かに口を開いた。

「オレの名前は、グリム・フォン・シュヴァルツだ。自己紹介が大分遅れたが、黒の公爵の城であるブラック・キャッスルで、とりあえず不本意ながら執事をしている」

「グリムね！　あ、わたしは黒崎亞莉栖、よろしく」

そう言つて握手をしようとした青年に手を差し出すと、青年はその歩みを止めた。

「……」

「え、なに、どうしたの？」

手を差し出す畠莉栖を見返し、黒い髪を軽く首を振る。

「お前と馴れ合いつもりはない。だが、お前はオレたちが守る。……なんとしてもな」

その表情から決意の色が見て取れるほど、青年は真面目な顔つきで声を発した。

何も言えなくなるような厳かな雰囲気に、畠莉栖はそれ以上口を開くことが出来なかつた。

「ああ、オレたちの城はすぐやつだ。いくぞ」

立ちすくむ畠莉栖に背を向けて、黒い髪を歩き出す。見つめる背中はどこまでも黒く、同時に、ほんの少しの哀愁を感じさせた。

先を行く青年の背を考え深げに見つめながら、畠莉栖は後ろをついて行く。

その先で、絶望の現実と、幻想の希望を知らされたとも知らずに。

## 04 黒の城の住人たち その1 大きな帽子の女の子

狭まる奇怪樹たちを縫つようにして、森を抜けた亞莉栖の視界が突然開けた。

目の前に広がる風景は、まるでヨーロッパの格式高い貴族の所有地そのものだ。

そしてまず目に付いたのは鉄門だ。高さ五メートルもある格子状のそれは、錆や欠けの見当たらぬほど綺麗な造りで全てが黒塗りだった。

グリムは無言のまま門へ近づいていくと、門は自動に両開き、青年を敷地内へと受け入れる。

亞莉栖はその場に立ち尽くし、キヨロキヨロと見渡し、まるで小学校の修学旅行生のようにガーライルの像やその他珍しいものを見学していると、

「なにしてるんだ、さつさと入れ」

手招きされ、黒い「さか耳」に急ぐようと促される。

まだ自由行動ではなこととを悟ると、亞莉栖は一歩ずつ前へと踏み出しつつ、

「おじやま、します……」

自分はいたさか場違いなんじゃないかと、少し遠慮がちに黒塗りの門をくぐり抜け、敷地内へと足を踏み入れる。

瞬間、感じたのは匂いだ。明らかに先ほどまでの外の空氣とはまるで違う。ここには、死臭がない。

かと言つて特別なんの匂いがするわけでもないが、血生臭さがすつかり消えたことに亞莉栖は安堵のため息をつく。

亞莉栖が庭へ入ると同時、グリムは踵を返して歩き出した。

それに続く亞莉栖は好奇心旺盛な瞳で庭を見物する。

庭園に花はなく、殺風景かと思ひきや。丁寧に刈り取られた芝生はまるでチエスボードのようになつており、白黒市松のボードの上には亞莉栖の背丈以上もある数々の駒が配置されている。しかしおかしな光景だ。どこにも白のキングが見当たらない。変わりにあるのは、真っ赤なクイーンと、その他の駒だけ。

しかもよくよく見てみると、ゲームはすでに勝敗を決しているようだつた。

クイーンをキングとして捉えるならば、赤のクイーンに対し、黒のローンがチェックをかけている。恐らくはクイーンにプロモーションしているだろうが……。

一国のトップが、ナイトならまだしも、プロモーションしているとはいえローンにチェックをかけられるなんて……ちょっと情けない。と亞莉栖は微妙な顔をして、ゲームセットした盤上を見つめていた。

その他に庭で目につくといえど、中央の噴水だらうか。これまた吹き上がる水以外透明なものはなく、その全てが黒い石造り。

そして視線を正面へと投げた亞莉栖は、先ほど黒つさぎが言つていた通りの外観の城に、納得したように頷いた。

ブラック・キャッスルの名が表すとおり、その外装全部を黒一色に統一された、五つの尖塔を持つ城が目に飛び込んできたのだ。

「本当に黒いのね……」

呟くよろに発した声に、背中越しの声が届く。

「まあな。ここは黒の王国だから、たいていの物が黒いんだ」

「黒の王国?」

「ああ」

「じゃあ、白の王国もあるの?」

黒があるなら白だらうと、小学生並みの発想力で訊ねると、

「白は……消滅した」

途端に暗くなつたグリムの声音。思いつめたような表情は、背中を向けられている亜莉栖に分かるはずもない。

「消滅? じゃああなたたちは、一体なにと闘つてるわけ? あの変な怪物たち?」

「……赤の王国……」

長い庭をひた歩き、ようやく着いた城の入口。

トランプのスペードを象つた紋章が描かれた巨大な鉄扉は、門と同様、グリムの姿を認識すると、独りでに押し開くかのようにして開放された。

黒うさぎはその目の前で立ち止まると、急に執事然として亜莉栖に振り向き、

「オレたちの城へようこそアリス」

謠つように言いながら、今までの慇懃無礼な態度からは想像もつかないほどの丁寧なお辞儀をしてみせた。

それはまるで、華やかな社交界へと足を踏み入れたんじやないかと勘違いしてしまいそうなほど、人を惹きつけてやまない魅力を振

りまいていの礼だつた。

先に場内へと通された亜莉栖は、その内装に驚きを隠せない。

「うわあ……」

煌びやかなエントランスは黒一色かと思ひきや、高価そつた像の数々や絵画などの美術品で飾られており、外からの見た目ほど黒を強調したものではない。

一階の左右からは階段が伸び、緩やかなアーチを描きながら一階へと下る。一階の奥には薄暗く狭い回廊が目付いた。

庭園のチエスボードと同じく、白と黒の大理石が敷き詰められた市松の床を踏みながら、数歩前へ進んだ亜莉栖。

見上げれば大きなシャンデリアがキラキラと煌き、本当に現実なのか判断がつかなくなるほど、一般家庭で育つた亜莉栖からしてみれば、その様は見ていてとても現実離れしたものだった。

ある意味亜莉栖の家も、現実的ではないとも言えるが。

「不思議の国のアリス」、そして「鏡の国のアリス」の大ファンである両親は、家中グッズで溢れかえさせるほどコレクターだ。

その余波は亜莉栖の部屋にまで押し寄せ、結果、亜莉栖の自室もワンダーランドじみるまでに変貌してしまった。

ボウとしてうつりを抜かしていると、不意にどこからともなく少女らしき声が聞こえる。

「なんだつたわ、やつ歸つてきたのか？」

声のした方へ振り向くと、亞莉栖の眼卜には大きなシルクハットが……。

だばだばな黒のローブの上に男物のジャケットを羽織り、そして目立つほど大きな左手は、機械のようなグローブ型をしてい。それに幅子のサイドには、挿絵で見たことのある、10／6（10シリング6ペンス）と書かれた札が添えられていた。

「黒をつける黒を。それじゃどうちか分かんねえだらうが」

幅子から発せられたと思われる物言いに対し、グリムはも当然のように意見する。

そんなやりとつを見ていた亞莉栖はハッとして、

「…………片やつやれど片や幅子ひつて……あ、もしかしてあなたマッドハッターね……」

「違う、あんなアホと一緒にするな小娘。ミンチにされたいか」

間断なく返つてきた言葉は、おおよそ少女の発するには粗心しない単語だった。

それに対しても亞莉栖は不快な表情を顕にする。

「小娘つて……あなたの方が小さじじゃない！」

まるで子供同士の喧嘩だ。

未だに顔を見せないシルクハットの下、身長の低い少女はグリムに問うた。

「おこいつわ、おたかこいつが新しいアリスか？」

「だから黒を付けないと……ぐつ……」

少女と付き合この長い黒つわせは、これ以上の反論は無意味であることを理解している。だから素直に頷くことにした。

「……やつだ」

黒つわせの返事を耳にした少女は、落胆の色を多量に含むため息を一つ。そして首を左右に振る。

「なんていじだ。こんなのがアリスだと? またウチの負けじやないか。女王を喜ばすだけだぞ……」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ」

「あなたの呼ばわりされ氣に触つたのか、意味不明なことを口走る少女に対し、亞莉栖は食つてかかつた。

「あんたね、名も名乗らないで訳分かんない事言つてんじやないわよ! 大体わたしだつて、こんな所に来たくて来たわけじゃないのに!」

「ほう、今回のは多少威勢がいいようだな」

「まあな。オレにも食つてかかつてきてたさ」

「まあ、お前はなめられてもしかたないだろ?」

「なんだと? まあ、肝が多少据わってるのはいいことだな。ヤツらを見ても泣き出さなかつただけ今までよりもマシだ」

自分を他所に話しうす一人に苛立ちを覚え、亞莉栖は会話に割り込んだ。

「ちょっとわたしのはな

「

「それにそれだけじゃない。ヤツらの血液に対する免疫まで持つて  
る」

が、すぐさま言葉は遮られ、

「ほう！ 来たばかりの“アリス”がか！？」

尊大不遜な態度をとつていた少女は、グリムの一言で感心したよう  
に顔を上げた。

「……あ、可愛い」

帽子に隠れて見えなかつたその顔は、十歳くらいの少女に見える。  
肌は透き通るよつて白く、唇は瑞々しい、柔らかさが伝わるほど  
ぽつてりとしていた。

お人形さんみたいなあまりの可愛らしさで、なにに対しても怒つて  
いたのか亞莉栖自身忘れてしまつほどだ。

くりくりの瞳は純粋な赤色で、好奇に満ちた眼差しで亞莉栖を見  
上げていたが、

「誰が可愛いだ小娘、ミンチにされたいのか？」

外見を褒められるのが嫌いなのだろうか。亞莉栖の言葉を聞いた  
瞬間、メンチを切る少女。

その威圧感は黒つむぎをもたじろがせるものだったのだが、

「つて、褒めてるのにそれはな……」

「いいから落ち着け、このままじや話が進まない」

あまり少女を怒らせると後が怖いことを知っているグリムは、火

種を摘み取るために咄嗟に亞莉栖の口を塞いだ。

口を封じられた亞莉栖の声は、ぐぐもりながら喉奥へ。

「まあ、それもやうだな。アリスいじりはこれからも出来る」とだ  
し、これでしばらくなは退屈しのぎに困ることはないが……」  
「んもうもうう~~~~~？！（あんたはあたしをやうやくやつもりだ  
！！）

「おおつとすまない。これじゃゲームが始まる前にゲームオーバーだな」

気づけば口と鼻を塞いでいた手をパッと離し、グリムは少女の隣に立つ。

すると帽子の少女は顔を上げ、ア莉栖を見ながら口を開いた。

「しょうがない、不本意だが教えてやる」

「いのちこれがモー、変なところで執事面するな。」

ポンと頭を叩かれた少女は、そのまま振り向かず、そのままグリムの脛へ蹴りを放った。身長が低いため、ちょうどその蹴りは弁慶を直撃。おおう、と呻きながら前かがみになり、黒つわせは涙田で蹲る。ふんっ、と鼻を鳴らすと、少女は続けた。

「……仕方がないから詫びてやる。紹介が遅れたなアリス、ウチは  
アンダー・ティカ―のマティ・ツェツペリンだ」  
「アンダー・ティカ―？ そんなのいたつけ？」

痛そうに脛を摩る黒つさぎを他所に、亞莉栖は聞いたこともない言葉に疑問を呈した。

すると無理をした風にすくすく立ち上がる黒つわわが、それに端

的に答える。

「墓堀人だ……。まあ、正確には葬儀屋なんだが　」

「なんだ、もう少しあてて寝てろよ、つわさ」

「馬鹿言え。このへりへりでくたばつてたら、これから先こいつを守れないだろ？　が……」

疑問の答えにはまるでなつておらず、楽しげに会話し出す二人についていけない亞莉栖は、一人取り残される形となつた。

……それから数分後……。

「やうだ、公爵のやつはどこだ？」

思い出したように発せられた青年の声に、呆然としていた亞莉栖は瞬時に反応を示した。

「ちよつとちよつと、公爵つて、執事のあんたより遙かに位が高い貴族なんじゃ……」

「ん？　それがどうかしたのか？」

「どうかしたのか？　じゃなくて、仕える側の人間がそんな言葉遣いして大丈夫なのかってことよ」

どこで誰が聞いているかも分からぬ城内で、亞莉栖は自然にヒソヒソ声になる。

「ああ、そんなことが……。それなら大丈夫だら、お前もその内分かる」

それが当たり前のような口振りに、亞莉栖は怪訝な表情を浮かべ

た。

小さく息を吐くと、がっかりした様子で、

「わたし、執事つてもつと慇懃なのかと思つてた……。けど、幻想だつたみたい……」

「はは、グリムにそんなこと期待しても無駄だ。こいつは少し変わつてるからな。なんせあのみ」

「オホン！」

マティが何かを言おうとした瞬間、黒うさぎは殺人鬼も吃驚なほどの鬼の形相で少女を睨むと、一つねざとらしく咳をした。大層驚いた様子のマティは、帽子を押し下げ、無言の威圧感から逃れようと身を縮ませる。

（……この二人の関係つて、どちらが上なのかしら）

亞莉栖はそんな事を思いながら、一人を不思議そうに交互に見比べた。

「……さて、ところで、公爵はどう行つた？」

グリムの声がいつも通りの口調であることを確認すると、少女は帽子を上げながら言った。

「やつなら厨房だ。今頃食つてる最中なんじゃないか？」

「なんだまたなのか」

「しょうがないだろ。やつの暇つぶしつて言えば、それくらいしかなかつたんだからな」

「それもそだがな」

「だが、これからは安心だね？　あいつの楽しみが“戻つて”き

たんだから「

「……それも、そう、だけどな」

グリムとマテイは揃って亜莉栖を見やる。その視線はどこか同情しているようにも見え……。

「な、なによ

「頼んだぞ」

言われ、黒づきに肩を叩かれる亜莉栖。

「なにが？」

「さて、では厨房に行こつか、アリスト

疑問符の浮かぶほど首を傾げた亜莉栖は、そのまま背中を押され、厨房へと連行されていった。

城を入つてすぐ見えていた、一階正面の狭い回廊を歩くことおよそ五分。

城内は広く、薄明かりしか灯されていないため、回廊を歩けば歩くほど方向感覚も次第に狂つてくる。

迷路のように入り組んだ道程は、さすがに覚えるのには時間がかかりそうだった。

そうして着いた一つの扉。

例に倣つて、スペードの紋章が描かれた扉には、合わせて「クッキングルーム」と書かれたプレートが打ち付けられている。

「さあ着いたぞ、ここが厨房だ」

黒つわぎは亞莉栖の肩をポンと叩き、扉を開けるように促した。

一度顔を見返した亞莉栖は、「なんでわたしが?」といった表情を浮かべると、扉へ視線を移し、取つ手に静かに手を添える。すると急に中から聞こえた妖しい声。

「こ、公爵様、い、いけません……」

それは女性の声だった。

強く言いたいが遠慮がちで、でも満更でもないような声に次いで

……、

「よいではないか。世は……世は……」

興奮したように鼻息を荒くする、野太い男性の声が聞こえる。

「ちよ、ちよっとちよつと……。」

亞莉栖は掴んだドアノブから手を離し、顔を背け、隣に立つているグリムの袖を掴みながら小声で話しかけた。

「なんだ？ つうか汚れるだろ、離せ」

「まだ着替えを終えていないため、亞莉栖の服は泥で汚れている。それが飛び火することを嫌つたグリムはすばやくその手を放つた。

「さつき食べてる最中だつて言つてたあれ……そ、そういうことだつたのつ？！」

扱われたことを気にすることもなく、しかし男女の情事を想像してしまい、瞬時に顔を真つ赤に染め上げる亞莉栖。

それに対しても青年は、下へ視線を移してマティとアイコンタクトをとる。

「なにを想像しとるか知らんが、入らなきや話にならない。開けて見てみる」

少女は半ばうんざりした様子で肩を竦めると、青年に向かつて開けると手で合図をする。

グリムは小さく嘆息し、ドアノブに手をかけた。

「ちょっと待つて！ わたしまだ心の準備が」

ガチャ。

亞莉栖の静止も意味を成さず、扉が開けられた瞬間香つたのは、甘い匂いだ。隙間から、まるで街のケーキショップにいるようなお

菓子の匂いが洩れてきた。

暗がりな廊下に眩い光が射し込み、亞莉栖の視界がゆっくりと開けていく。

照明の光に慣れていない目を塞ぎ、背中を押されながら亞莉栖は数歩前へと進む。

耳をつくのは男の荒い鼻息、そしてそれを止めようとする女性の声。

亞莉栖は手で顔を覆つたまま、恥ずかしさからイヤイヤを繰り返す。

ムシャ、ムシャ、ボリ。

「……ん？」

途端に聞こえた咀嚼音。

ムシャ、ムシャ、ボリボリ……。

亞莉栖は指を少しだけ広げて、その隙間から向いの側を覗いてみた。

するとまず、がっくりと残念そうに頃垂れる、メイドの格好をした女性の姿が目に付いた。

咀嚼音を聞きながら首を左右に振り、こめかみに手を添えてはまた首を振る。

そしてその視線の先、調理台の上に胡坐を描いて座るのは、コスプレのような黒い王族衣装に身を包む中年の男だった。

鼻息を荒くしては、台の上に乗せられたクッキーやラッキーやらを大量に口へと運び入れている。

あまりに突飛な出来事に、亞莉栖は目を丸くした。

「なに、あれ？」

誰に向かつて問うでもなく呴かれたその言葉に、グリムは愕然とした態度で答える。

「あれが黒の公爵だ　　」  
「ただの変態だ」

グリムの声に一拍の間も置かず、マティは顔を顰めて言い放つ。そしてそのまま公爵へと声を投げた。

「おー公爵、アリスが来たぞ」  
「……世は……世は……」

少女の声が届いていないのか、ぶつぶつと呴きながら、ただひたすらに菓子を頬張る男。

その目は虚ろで、なにも映していないように見える。

「……なんか、危険な感じがするわね」  
「まあ、お前にしてみれば、危険だと言わざるを得ないだろうな」  
「え、それどういうこと?」

少女へ聞き返す亞莉栖の声が聞こえたのか、公爵らしき男はピクツと反応を示しその手を休める。  
そして両の手に菓子を持ちながらゆつくりと振り返った。

「つえ……?..」

目が合つたその男の顔を見た瞬間、亞莉栖は驚きのあまり大きく仰け反る。

お菓子が好きそにはまるで見えない、厳つい強面のオヤジだつたからだ。口の周りをケーキで汚したくりくりの金髪天パ男は、虚

ろな瞳をしたまま順々に人物の確認をする。

見慣れた黒うさぎ、口うるさい帽子の少女、そして……。

今しがた目が合つたばかりの亞莉栖の姿を瞳に映すと、淀んでいた双眸は瞬時に光を取り戻す。

「あ、アリ……アリス、ちゃん？」

強面オヤジから呼ばれるには、まるで似つかわしくない呼ばれ方をした亞莉栖は思いつきり顔をしかめた。あまりの気持ち悪さに、生理的に受け付けないと体は身震いする始末。

しかし呼んだ本人はどこか不思議そうに小首を傾げている。

「なにの人、どうしたの？」

隣で腕組して立っているグリムへ訊ねると、

「ああ、お前の服装が普通じゃないからだろ。そういうえば着替えさせるの忘れてたな……。おい公爵、知つての通り、ここへ来るのはアリス以外いないんだ。いいかげんそれくらい学習しや」

言いながら亞莉栖の肩を引っつかんで、グリムは亞莉栖を公爵の前に立たせる。

軽く背中を押され前のめりながら男の眼前まで来ると……、男は目を血走らせ、荒かつた鼻息はあるで機関車のよじに噴出する。

「アリ……アリスちゃん……」

「うわつ……！」

いきなり調理台から飛び上がった公爵は、そのまま亞莉栖へ向か

つてダイブした。

亞莉栖はそれを脅威的な危険回避能力で咄嗟に避けたと、男はそのまま口ケツトの如く勢いで壁に激突する。

シューと煙を上げる厨房の下壁に振り返ると、脅えた様子で亞莉栖は言つた。

「なに？！ 敵なの？」

「敵じゃないわ、こいつは」いつ見えても、この国で一番偉いんだ」

少女は言しながら公爵へ近づく。そしてみつともなく倒れる男の尻に蹴りをかました。

「いつまで寝てんだ！ もうもと起きろ」

「は、ハイ！」

声を裏返しつつも、少女の怒声に男は跳ね起きる。すると一瞬で表情を作り変え、「世は……」言しながら凜々しい男性像を取り繕つた。

しかしそれも束の間。やはり公爵には無理があるようで、厳つい強面は瞬時に崩れ、親バカ過ぎる父親のようにだらしない顔になつた。

「アリスちゃん……」 そつ言つて頬を赤く染め、手をもじもじさせてはハツとする。

「はあー、まあいい。よつやく」れで揃つたな」

グリムはその様子を見て呆れ顔で咳くと、

「ああそうだ。アリスの着替えを頼む」

「いまだに頭を抱えるメイドの一人へ指示をした。

「畏まりました」そう言いながらメイドは、アリスの腕に自身の腕を絡ませた。

「さあアリス様、お召し替えを致しましょ」

「え、ちょ、ちょっと……」

「オレたちは先に謁見の間へ行つている。着替えを終えたらお前も後から来い」

黒うさぎの声を後方に聞きながら、亞莉栖はメイドに連れられて厨房を後にした。

来た道を戻り、二階へと上がってしばらく明るい回廊を歩き、やつてきたのは衣装ルームだ。

亞莉栖が来るのを待つていたのか、中には数人のメイドが待機している。

室内を見渡すと、ポールに吊るされたハンガーには所狭しと衣服が掛けられていた。

中には王族衣装や執事服なんかもあり、この部屋が城の住人全ての衣装を収納している場所であることが自ずと理解できる。

「アリス様、まずはその小汚ならしいお召し物をお脱ぎになつてください」

入口を入つてすぐ、いきなり亞莉栖はメイドから衣服を脱ぐようになに催促された。

「つづりはどう？」

「はい。お脱ぎになられましたら、奥の部屋まで进んで頂きまや」

言いながらメイドは、部屋の奥を手で示した。

入口からでも見えるガラス張りの小部屋。マジック://ラーなのか  
表面は鏡になつてゐる。

「ヤ」でシャワーを浴びて頂き、終わりましたら体を拭き、全裸の  
まま「おさらべ」らして「だわ」

「え？！ ゼ、全裸？？」

「はい。アリス様のお体を隅々までたっぷりねぶ

騒り……」

先の公爵のように目を血走らせ生睡を飲み込み……しかし至つて  
冷静に淡々とメイドは答える。

「いえ、隈なくサイズをお計りし、お体に最適なドレスを仕立て上  
げるためですので、」了承下さいませ」

途中如何わしい単語をいくつか挟んだ氣もしたが、美しい礼をさ  
れ亞莉栖はたじろぎながらも淡々頷いた。

泥だらけのジャージとティーシャツを脱ぎ、水に濡れた下着を脱  
いでいる途中、幾方向からの視線を感じた。

気になりそちらへ目線を向けると、メイドたちは各自適当な作業  
を見繕つては目をそらす。

首を傾げながらも脱いだ衣服を籠に入れ、亞莉栖はそのままシャ  
ワールームへと歩いていった。

……およそ十分後。

わづ何日もシャワーを浴びていなかつたかのように思えるほど、

泥に汚れ気持ちの悪かつた体を洗い流してさつぱりとした亞莉栖は、濡れた髪を拭きながらシャワールームを出てきた。

……視線を浴びているのも忘れて。

開放感を感じたのだろう、家にいる時と同じ感覚で浴室から出てきた亞莉栖はその視線に気づき……。数度の瞬きの後、

「キヤアアアアーーー！」

髪を拭いていたタオルで咄嗟に体を隠して屈み込む亞莉栖。その顔は羞恥で真っ赤に染まっている。

「取り押さえろ！」

血眼になつて声を上げるのは先のメイドさん。メイド長の声を合図に幾人ものメイドが機敏な動きを見せる。

一人がすばやく亞莉栖を立たせ、一人はその背後に滑り込む。一瞬抱えあげられた亞莉栖は円形をした低いお立ち台の上へ。

そして一人がメジヤーを持ち、一人が片腕ずつを上げる。

先のメイドは冷静を装いつつも多少鼻息を荒くし、おもむろに亞莉栖の背後へ。

あまりにも一瞬のこと過ぎて、亞莉栖は思考が追いついてこない。茫然自失と立ち尽くす亞莉栖へ、怪しい笑みを浮かべたメイド長は、ゆっくりと魔手を胸へと近づける。

そして 、ふよん。

大きくはないが形のいい亞莉栖の乳房に触れた。

「え？ ……え？」

感触に気づいた亞莉栖は視線を下へと落とす。すると自身の胸を揉みしだく卑猥な手つきの女性の両手を双眸がキャッチした。

「ちょ、ちょっと… なんでおっぱい揉んでんのよ…」

「アリス様、これも歴としたサイズ測定なので我慢なさつてください」

「ていうか、あんたメジャー持つてないじゃない！」

メイドは一々口した顔をして……しかし田つわは真剣に鋭く、黙々と胸を揉み続ける。

「いや、あの、ちょっと、ん……」

「アリス様、変なお声を出さないで下さい、気が散ってしまいます」「そうですよアリス様。あなたにぴったりなドレスを仕立て上げるためです」

「我慢なさつてください」

「そうです、我慢ですよアリス様」

皆一様に笑みを浮かべながら勝手なことばかり言つ。周囲にいたメイドたちも我慢の限界なのか、それぞれが腰やヒップに手を伸ばし始める。

アリスは顔を赤らめながらも、しばしの間、羞恥な身体測定に唇を甘く噛みながら、必死に耐えるのであった。

……それからおよそ一十分。

ぐつたりした様子の亞莉栖は床に横たえられている。……全裸のまま、タオルを掛けられた状態で。

文字通り頭からつま先まで、妙な手技を交えた身体測定が行われたことに、亞莉栖は疲労困憊してしまったのだ。

賑やかだった室内にメイドは一人。亞莉栖をここまで連れてきたメイド長だけになっていた。

くすくす笑いながら彼女は、肩で息をする亞莉栖に向かつて温か

い視線を投げる。満足そうな笑みを口元に称えて。

……亜莉栖が起き上がるちょうどその頃、部屋にはさつきまでいたメイドたちが次々に部屋へと戻ってきた。それぞれの手には衣装が携えられている。

ある者はドレス、ある者はヘッドドレス、ある者はエプロンと、六人揃うとメイド長は声を上げた。

「さあアリス様……お召し替えのお時間です」

「え……？ つてそれに着替えるの？…」

「もちろんです。まあ、お立ち台の上へお上がりください」

無理やり立たせられ、再び亜莉栖はお立ち台の上へ。

まず着付けられたのは下着だった。本人ですら身に着けたことのない大人っぽい黒レースの下着。

続いて穿かせられたのは黒のストッキングだった。ガーターベルトと繋げられた二ハイ丈のもの。左右の腿の辺りには何かを差し込むベルトが付けられている。

上からかぶせられた黒のお仕着せはミニスカートで、その上には純白のエプロンを着させられる。

栗色の長い髪を両サイドで縛られ、最後にヘッドドレスを被せられた亜莉栖。

黒の編み上げブーツを用意されそれに足を通し、手首にはフリルがあしらわれたカフス付き長手袋を着用した。

サササツ と姿見の前まで移動させられると、あまりの衣装の可愛さに、思わず亜莉栖は目を瞠る。

「これ、わたしなの？」

「もちろんですよ。素材がいいから苦労しませんねー。いえ、アリ

ス様の為なら苦労なんて惜しみませんけど」

メイド長の言葉もそこそこ、亞莉栖は体を左右に捻つて、いつの間にかメイクまで終わっている自分の姿を確認する。

「どうぞお嬢さんがいるのかと、本人なのにあまり自覚がないようだ。

亞莉栖は年頃の女の子にもかかわらず、普段から衣服やメイクに気を使つたことがない。

元がいいんだから、メイクにもっと派を配ればモテるのに……。とは友人談だ。

衣装が気に入つたのか、先ほどまでの羞恥心が嘘のように晴れ晴れとした顔つきでメイド長を見返すと、

「ありがとうございますー！」

両の手をがつしりと掴みブンブンと大きな動作で握手を交わす。恍惚とした表情を浮かべ熱い吐息を洩らしながら、メイド長はしばしの間時を忘れた。 が、

「あ、アリス様、グリム様とマティ様……それと、変態公爵様がお待ちですので謁見の間へお急ぎください。 いらっしゃい」

公爵はついでと言わんばかりに嫌な顔をすると、メイド長は亞莉栖の手をとつて駆け出した。

亞莉栖は振り向き様に室内に残つていたほかのメイドたちに礼を述べると、メイドたちは遠のく亞莉栖の背中を指を咥えて羨ましそうにジッと眺めていた。

## 06 千人目の「アリス」

謁見の間では既に公爵、黒うさぎ、アンダーテイカーの三人が集まり、亞莉栖が来るのを今か今かと待ち侘びていた。

公爵は、小階段の上に位置する玉座に腰掛けキヨロキヨロと辺りを見渡し、まるでらしくないほどに拳動不審だ。自分がその席にふさわしくないことを理解しているのだろうか。

マティはその玉座の隣でなにやら左手のグローブをしきりにいじり倒している。機械の手袋は指先が展開しては細かなアームが突出し、各部の異常を確認するかのような動きをしてはまた元に戻る。

グリムはとすると、玉座の四方を囲う古代の神殿を模したようなレリーフの彫られた柱の一つに、背もたれながら舟をこいでいた。待ちくたびれて目を閉じている間に、夢の中へと微睡んでしまったようだ。

「ん？」

すると突然、マティが何か音を聞きつけたように顔を上げた。続いてグリムも目を閉じながら顔を上げる。公爵は不安げな顔でおどおどとし、彼にだけは聞こえていないようだつた。

廊下を駆けて来る音は次第に大きくなり、そして 謁見の間の扉が勢いよく開かれる。

「遅れまして申し訳ございません。が、アリス様、どうぞ玉座の方へ

陳謝を一言述べてから、メイド長は頭を下げて横へとはける。息を切らしながらも亞莉栖は、乱れた呼吸を整えるかのように深呼吸をしながら歩き出す。

「ほ……」

田を開じていた黒つわものは、黒の国に出生する黒いバラの香水を嗅ぎ付け、静かに田を開けてため息を洩らす。

「よつやくアリスらしくなつたじやないか

先ほどまでの薄汚れた格好からは想像も出来ないくらい、飛躍的に美しくなつた姿にそう感くと、恥ずかしいのか亞莉栖は視線を逸らし頬を赤く染める。

「さて、アリスも来たことだし、話を始めるか

これで何度田だ、と言わんばかりこうござつした様子でため息をつくと、マテイは数歩前へ進む。

そして亞莉栖が玉座の階下へ来たところで説明を始めた。

「アリス、お前にはこじがどこだか分かるか?」

唐突に質問され、けれど亞莉栖は荒れることなく頷きながら答えた。

「ワンダーランド、でしょ?」

「その通り、よく知ってるな。まあ、今まで来たやつらの中にも、なんとなく知ってる奴はちらほらいたが……」

腕を組み、感心した風に少女は肯定する。

「ねえ、そのやつから今までのーとか、アリスだったらーとかつ

て言つのはなんなわけ？ もしかして、わたしの他にもアリスって子が来てたの？」

「やうだ」

「やうなんだ。

つて、え？」

「正確に言つと、お前で千人目アリスだな」

「……いや、桁数がいまいちピンとこないんだけど……千……？」

その子達は今どこに？？ あー、ワンダーランドから帰つたのかな

するとマティはグリムへと視線を投げる。つられて亞莉栖もそちらへ目を向けた。

一度嘆息すると、黒つさきは真剣な眼差しを亞莉栖へと返し、静かに口を開いた。

「赤の女王のもとだ」

「なんだー元気にやつてるんじやない」 つてあれ、赤の女王つて、敵、じゃない？

「まあ、首だけなのが、元気だと言つのならな

えつ？」と亞莉栖は聞き返す。いま何を言われたのか、一瞬分からなかつた。聞きたくなかった言葉が混じつていた気がする。それは何だつたのか……。首……、そう、首だ。

首だけ……その言葉が頭の中を、幾重にも重なつて木靈する。首だけの意味つて何だう？ 首だけつてことは体が、ない？ 体はどこく、いつたんだろ？

呆然自失し立ちつくす亞莉栖の背に、不意に少女の声がかかつた。

「はつきつ言つてやると、今までにやつてきたアリスは、ほとんどがヤツらに殺された。お前がここへ来る前に襲われた、ジャバウオックの影だ。のち、その死体はヤツらによつて運ばれ、女王が首を刈る。悪趣味なことに、その首は、あの女の城でコレクションと化

していいやつだ」

「もしかして、わたしも……死ぬ、の？」

「ウチラが守る、とは強く言い切れない。今までのアリスはほとんどが守りきれなかつた。そればかりはどうなるか判らない。だが、さつわいわざが言つていたように、お前には適正があるかもしれない。『アリス』の適正がな……」

死の恐怖に洗脳されたように思考は硬直し、亞莉栖は少女の言つてゐる意味がまるで理解できなかつた。すると柱から離れたグリムが階段を下りていき、恐怖に震える亞莉栖に近寄つた。

「ヤツらの血には正氣を失わせる効果がある。だが、お前は氣を狂わすどころか嘔吐すらしなかつた。今までのアリスは狂わされ、踊らされ、そのままヤツらに殺された。その点お前には耐性があるんだろう」

「そして耐性持ちとこり」とは、初めて奴らと対等に戦えるアリスを、ウチラが得たと言つことになる

「戦う……？　このわたしが、あの化物たちと？」

「そうだ。そしてお前は『アリス』になれ」

意味不明なことを言い出すグリムに対し顔をしかめると、亞莉栖は大きく首を横に振つた。

「いや、無理無理！　あんなのと戦えだなんて……無理に決まつてるわ。てかそもそもわたしは亞莉栖だし、アリスってなによ！」

「アリスはこのワンダーランドの真の統治者の称号だ。そして同時にその者の名である」

グリムとマティの言葉に板挟みにされ、ますます思考が追いついてこない。混乱する亞莉栖を余所に、グリムはさらに話を続けた。

「もともとワンドーランドは平和だった、らしい」

一人目のアリスが当時、幼いながらもワンドーランドを統治したことにより、長らく平和な世界となっていたのだが……。そんなある日、ワンドーランドに異形が誕生することになる。それは人々の負の想念が生み出し、形作ったジャバウォックだった。

それは、中でも嫉妬深く欲深いダイヤの公爵夫人をたぶらかす。そんなある日を境に、気の狂ったダイヤの公爵夫人により、ダイヤの王と女王、さらにはハートの女王と王までもが斬殺されるという惨たらしい事件が起きる。

結果、白は壊滅。異形を率いる公爵夫人が赤の女王を名乗り、世界図は赤と黒とに塗り分けられた。

最初に来たアリスは元の世界へと帰ってしまい、その首を刈れなかつたことを嘆いた女王は、迷い込む『アリス』の首を執拗に狙うようになった。

以後、もとのワンドーランドを取り戻すべく女王に立ち向かう黒と、アリスの首をコレクションとすることを至高の喜びにしている赤とで、互いに血で血を洗う戦争を始めたのだ。

ふう、と小さく息を吐き、黒つきは話を切る。

「つまり……もとの平和な世界を取り戻すためには、その公爵夫人を倒さなきゃならないわけ？」

「そういうことだ……」

「……でも待てよ、となるとこの世界は鏡の国が今のメイン……？いや、デスゲームにトリップつてわけでもなさそうだし……、最初の子が統治したってことは、不思議は終わっちゃってるのかな……あつ」

「つまらぬ、お前は有力なアリス候補なわけだ」

「……もしかして、パラレルワールド？」

亞莉栖の動きがピタリと止まる。もつそれ以外の答えが見つからなかつた。

来た当初は、こちらへ来る前までやつていていた「アリス・イン・デスゲーム」の世界にトリップしてしまったものだと思い込んでいたが、話を聞く限りではそういうわけでもないらしい。

それに所々で設定に食い違がある。

そして他の二つの話からしてみても、黒つさぎやアンダーテイカーなんてキャラクターは出てこないはず。

途中まで同じ歴史を歩んでいたワンダーランドが、どこかで道を踏み違え話が変わつてしまつた世界。

亞莉栖は口を開けたままグリムを見て、そしてマティへ視線を移す。

「一体、どうなつちやうの？」

不安げに呟いた一言は、けれど先ほどまでの恐怖心は徐々に薄れ嬉々としたものを孕んでさえいた。

そんな亞莉栖に対してもマティは、くく、と小ちく笑い声をもらす。

「大したやつだ。これなら、もしかするともしかするかもしれないぞ？」 なあグリム

視線を投げたその先で、黒つさぎは怪訝そうに顔をしかめていた。何かを危惧しているような、でも心配しているように見える複雑な表情。

言葉を返さない黒つさぎから、少女は視線を亞莉栖へと戻す。

「アリス、候補？」

「そ。森で遭遇したジャバウォックの影、あれ、なんで出来るか知ってるか？」

聞かれた亞莉栖は当然のように首を横に振った。

「アリスの血液だよ

」

少女の発した言葉に亞莉栖は戸惑つ。

たしかに襲われた影は血で形作られていた。霧散して消えた後には血溜まりが出来ていたし、臭いも血液そのものだ。

しかしあれが「アリス」の血で出来ているとはどうこうことだろう。混乱冷めやらぬ頭で考えてみると、まともなものが浮かばない。

「お前、さっきのグリムの話を聞いて疑問に思わなかつたか？ 首が城にあるのなら、体はどうくいつたのか」

その時、「ククリ」と音がした。唾を飲み込む音だ。それは亞莉栖の喉元から発せられた音だつた。

「本当かどうかは定かじやないが、アリスの体はジャバウォック本体の餌らし。本体が食し、そこから影は生まれるんだそうだ」

「あの血液が、アリスのものだつていうのはやうこいつことなのね……」

「まあ、チヨシヤの話によると用途はそれだけじやないみたいだけどな」

マティはチラリとグリムを見やる。視線に気づいたのか、黒つさきは顔をしかめて一瞬睨むと、明後田の方へ視線を飛ばす。

その反応を面白がつた少女はケラケラと笑いをこぼした。

一人のやり取りに不思議な顔をしていた亞莉栖だったが、そついえば、と思に出したように口を開く。

「まだ見てないけど、チヨシヤつているの？」

腹を抱え目に涙を溜めるマティは、笑いながら水滴を拭い亞莉栖の問いに答える。

「くくく、ああ、いるや。ワンダー「ランド」でやつを知らないものはいない、なあ、グリム？」

「つぬるやこ、オレにその話を振るな」

なぜか会話に入ろうとしない黒うし<sup>ウシ</sup>がほ、微かに震えている気がした。見れば耳まで真っ赤にし、鋭い犬歯を剥き出しにして怒っている。

「黒の国の住人じゃないのかしら？」

「まさか。やつは女王のペットだぞ？」<sup>レリ</sup>「こ<sup>レ</sup>るわけがない」

「え？ ならどうしてチエシャから敵の情報が聞けるのよ」

「それはやつが情報屋だからだよ。それ相応の見返りがあれば口を開く。それに、あいつはペットといつても忠誠を誓つてるわけじゃない。あちらの情報を黒に教えてくれたりもする。だが反面、こちらの情報までリークするから困つたもんだが。恐らく、新しいアリスが来たことも既に女王へ報告済みだろ<sup>うな</sup>」

少女は腕組しながら頭を悩ます。

与えられる情報全てが真実ならいいのだが……。如何せんチエシャは自由すぎる性質の持ち主だ。その情報には出鱈<sup>出鱈</sup>目なものも多く含まれる。樂しければいい、面白ければいい、ただそれだけの思考の持ち主なのだ。

「てことは、わたし外出たらもう完全に標的なわけね

「ま、そういうことだな」

がつくつと頑垂れる亞莉栖の表情に、絶望と言つ<sup>一</sup>一文字はない。

落胆してはいるものの、別な感情が新たに芽生え始めていた。

「でもわたし、戦えないんだけど……」

「それなら安心しろ。本当かどうか定かじやないが、ジャバウォックを倒せる剣がこの世界のどこかにあるらしい」

「……それって、ヴォーパルの剣のこと?」

「ほう、そこまで知つてると、今回のアリスは博識だな」

マティは機械の左手を打ち鳴らして、感心の拍手を表す。

「それなら話は早い。ウチらの画面の目的は、ヴォーパルを探しながらヤツらの数を減らしていくことだ」

「それで、何が安心なわけ?」

「これもチエシャがいつか言つていた話だが、ヴォーパルはアリスにしか扱えないらしい。そしてその条件をクリアしていないとそれに触れることすら叶わないといつ

「その条件って……」

「狂氣、だよ」

マティの言葉に亞莉栖は目を白黒させる。言われたことの意味がまともに頭に入つてこない。文字通りの耳から耳へと、脳を介さずに右から左へ聞き流す。

「なんだその顔は、これは光榮に思つべきだぞ。なんせ有史以来何人たりとも触れることすら叶わなかつた、ヴォーパルとやらに選ばれるかもしれない資格を、お前なんかが有しているかもしれないんだからな」

「資格? 資格つて、なにが……」

「だから言つたろ? 狂氣だよ、狂氣。狂つた氣質だ」

「狂つた……つて、わたしが? ?」

啞然として訊ねると、少女は首を縦に振った。

「どうが？」

「アリスがアリスの血液に中でられない時点で、もつ既にお前は狂つてゐる。アリスじゃない者なら話は別だがね……」

再びマティの視線はグリムへ移つた。お前もなにか言つたらどうだ？ そんな意味合いも含んだものだったが、それ以上に意味深い色が見て取れる。しかしその真意に亞莉栖が気づくはずもなく、言葉の意味をよじやく理解した彼女は強く首を振り回した。

「わたしは狂つてなんかないわよ、至つて普通だわ。ただ、慣れてきたつてだけで……」

「それがもう異常なんだよ。自覚はないんだろうがね」

すると突然、グリムは思いつめたような顔をして亞莉栖に振り向いた。その目付きは相変わらず鋭いままだ。なにか言いたげに口が一瞬動いたが、そこから声が漏れることはなかつた。

「さて、話も一通り終わつたことだし、そろそろ解散するか

もう一度手を呂くと體子の少女は歩き出す。

「あの、ちよ、ちよっと……」

だが亞莉栖はそれを呼び止めた。ん？ と躊躇つか見返すのは他でもない帽子の少女。

「まだ何かあるのか？」

「いや、あなたたちのこと、まだよく知らないんだけど」「そんなものはここにいれば必ずと分かるだろ、じゃあな」

さも面倒臭そうに言葉を返すと、長じロープを引き摺りながらマティは階段を下りていく。どうやら謁見の間から出て行くようだ。しかし扉の脇で頭を下げるメイド長の横までやつて来ると、ぐるりと振り返り声を発した。

「ああそうだ、アリス、後でウチの工房に来い。ヴォーパルがどこに在るかまだ分からんからな。とりあえず繋ぎの為の武器をくれてやる、絶対に来いよ、遅れたらミンチだからなー！」

「え、あ、うん。いや、時間

「

何時に行けばいいのか聞こうとした亞莉栖の言葉に耳を傾けることもなく、それだけを一方的に言い残すと、マティはメイド長について開けられた扉から小さな歩幅で足早に出ていった。

「時間……は？ つて、わたしミンチ？」

グリムに振り返り亞莉栖は訊ねると、知らん、そう言つて黒つさぎはため息を吐いた。

少しの沈黙が場に流れる。

空気は徐々に重たくなつていき、けれどある人物の弦きによつそれは打ち碎かれた。

「アリスちゃん、はあ、はあ……」

瞬時に顔を引き攣らせ、最大級の嫌悪感を顕にする亞莉栖。玉座に振り返ると、鼻息荒く、公爵がなにやらカメラのよつなものを連写しているのが見えた。

「な、なにしてんの、あれ？」

「見ての通りお前を撮つてゐる。アリスを愛でるのが公爵の趣味なんだ。放つておけ、あれがあいつの楽しみだからな」「さつきマテイが言つてたのつて、あれだつたのね……。いや、て

か撮られてゐわたしの氣にもなつてよ」

「じき慣れるや」

慣れたくないんだけど、と身の危険を感じ身震いしながら呟く亞莉栖に、メイド長も共に不快感を顕にして「とは氣付く由もなかつた」。

一度肩を竦めると、黒つわせたつと近づき亞莉栖に耳打ちする。

「マテイの用事が済んだら、あとでオレの部屋に來い。話がある……」

「え……？」

甘美な響きが直接脳内を愛撫する。

……身の危険はすぐ近くにも？！

ゾワゾワとした悪寒にも似た寒氣に身を震わすと、亞莉栖は一瞬で耳まで真っ赤にし、光の速さでグリムから飛び退いた。自身の体を抱きしめてイヤイヤを繰り返す亞莉栖を尻目に、黒こつさ耳は扉へと徐々に遠のいていく。

メイド長になにか話しているようだが、それは亞莉栖の元まで届かない。すると出でいくグリムの背に礼をして、メイド長は亞莉栖の方へと歩いてきた。その顔に満面の笑みを貼り付けて。

「ヒラ～」

先ほど身体を散々玩ばれたのを思い出したのか、完全に怯える亞

莉栖はにじり寄るメイド長から後退る。

「アリス様へ、マティ様がお待ちですので、早く参りましょ~う~」

鼻にかかるような甘い声を出しながら、十メートルほどの距離を一瞬で詰めたメイド長。莉栖の腕をがつしりと掴むと、涙目の中莉栖にお構いなしに謁見の間から連れ去った。

「あ……」

そうして謁見の間に一人取り残された強面のオヤジ。愛でる対象である莉栖がいなくなつたことにより、凛々しい顔つきに戻る。しかし

「うう……う……」

俯き肩を震わせる公爵は次第に涙声になると、「アリスちゃんーんーー」と大声を上げてとうとう泣き出した。

瞬間、柱の影から現れたのは複数人のメイドさんだ。耳には用意のいいことに耳栓が装着されている。

各々役割があるのか、ある者は公爵をあやし、ある者はカメラを取り上げ、そしてある者はドンツ、と鋭い手刀をその後頭部にかまし、公爵を氣絶せると面倒臭そうに肩に担ぐ。

「あーあ、またやつちやつたわね」

「仕方ないでしょ? まったく、いい年こいたオヤジが女々しい……」

「後が大変なんだから……また記憶失うのよ~」

「分かってるけど……」

互いに文句を言いながらも、メイドたちは公爵の体を支えて出口へ向かう。それは玉座の後方にあるもう一つの扉だった。

見事な連係プレイにより気絶させられた公爵は、謁見の間からの退場を余儀なくされる。今までの記憶を一時的に失つて、また亞莉栖が来た事から教えられる」とになるとば、眠る彼には思いもよらないことだろう。

強引に手を引かれ、亞莉栖が連れられてきたのは地下室だった。螺旋階段を下りてすぐ目の前には扉があり、しかもそれは大人サイズの扉ではなく、明らかにマティの身長に合わせて作られたでろう小さな扉だった。

「さ、どうぞ」とメイド長に促されるままに、亞莉栖は腰を屈めて扉を開けてくぐる。

そうして亞莉栖の視界に広がったのは、至って普通の奥行きと高さのある部屋だった。入口が小さかったために、中もそうなのだろうと半分期待しつつ入室したため、多少の落胆は否めない。

しかし奇怪な光景だ。

部屋の隅にはゲームで見たことのある……確かアイアンメイデンと言う名の拷問器具が屹立し、早く誰かを抱きたそうに胸部を左右に割り開いて待ち構えている。その内側に取り付けられた剣山のような針山は、血が付着して固まった跡が窺える。

そして辺りに散乱しているのは様々な器具。ドライバーやはさみ、釘にペンチ、錐にのこぎりなどなど多種多様。

壁一面には東洋西洋を問わず、刀やら槍、剣やナイフに斧まで、まるで武器屋の如く飾られている。

他には三角木馬や剣山の付いた椅子など、武器が飾られていなかつたら、ただの陰惨な拷問部屋だ。

すると突然、肩を落として呆然と立ち尽くす亞莉栖に声がかかつた。

「ようやく来たか……三十数秒の遅刻だ。ミンチだな」

暗がりから姿を現したのは言つまでもなく、この部屋の主人マテ

イだ。

「え、み、ミンチ？！ しつかしアバウトだなあ」

「遅れてしまい申し訳ございませんマティ様。如何せん、アリス様の歩くのが遅いこと遅いこと。別に言い訳をしているわけではありますんが、今度メイドたちにイチゴのパンケーキを作らせますので、どうか平にご容赦下さいませ」

「いや、十分いい訳臭いから

「ふむ、まあパンケーキなら許してやつてもいいか……

「つていいんかい！」

話の流れから一度に二人に突っ込みを入れることになり、多少気疲れした様子の亞莉栖は、しかしふふふ、と笑みを零した。

「ん？ なに笑ってる」

「いやーべつに……。ただ、やつぱり女の子なんだなーと思つてさ」

「なんだと？」

「だつてイチゴのパンケーキだよ？ そんなものに釣られるなんて、まだまだ子供じゃない」

すると不意に カキヨツ、と音がした。

気づけばそれはマティの左手から発せられた音だった。音は次第に大きくなり、左手にはめられた機械のグローブが展開しては組み変わり、それは巨大な手へと変貌を遂げる。

少女ほどの多さもある拳が開閉を繰り返すと、メイド長は慌てた様子で亞莉栖にしがみ付いて進言した。

「うわっ、ちょ、ちょっとなに？」

「ああアリス様！ マティ様は子ども扱いされるのが嫌いな方

なのです！ あれで何人のアリス様が文字通りのミニンチに……！  
？」

えっ？ と亜莉栖は顔を引き攣らせる。

よくよく見てみると、機械のグローブには微かな色が見て取れた。よく目を凝らしてみてみると、それはなんとなく血が乾いた跡のような気がしないでもない。さらによく見なければ気づかないほど、小さな肉片のようなものも見受けられた。

「げつ？！」と声を漏らし一瞬で顔面蒼白になると、亜莉栖はダラダラと冷や汗をかき始める。

「ああっ！ せっかく着せ替えたのに……、まあでも、楽しみが増えました。ありがたやありがたや」

と、今の状況を焦っているのか、後の楽しみに胸躍らせているのか。感謝してるのか恐怖してるのか分からぬ暢気なメイド長を余所に、亜莉栖は完全にその場で固まつた。

田の前には小さな凶悪な危険人物が仁王立つて。その左手から奇怪な音を響かせて。

一歩ずつ歩み寄つてくる小さな巨人が、その目に殺意を灯してい

る。

ガシャ。

グローブが大きく開く音にビクつき我に返ると、亜莉栖は急に慌てふためいた。

右に左に、行き場のない箱に閉じ込められたネズミのよつに走り回ると、働かない脳をフル回転させ、眞い言い逃れ方を考える。差し迫る恐怖で纏まらないが、ハツとして氣づく。先ほどの会話でお菓子が好きそだということを。

一步一歩と、まるで機械のように正確な歩幅で歩いてくるマテイから後退さりながら必死に考えた。考えて考え抜いた結果、自分でも作ることが出来る一つのお菓子が思い浮かんだ。

扉まで追い詰められ、ようやく浮かんだものを慌てて亞莉栖は口走る、

「ほ、ホットケーキ！ 今度作ってあげるから――――――」

亞莉栖の絶叫する声にピクッと耳は反応し、その進行を止めたマテイは小さく首を傾げる。

「ほつと、ケーキ？」

不思議そうな顔をして訊ねる少女は、またに小動物のよつ元に愛らしい。

しかしその反応に一番驚いてるのは亞莉栖だった。言い逃れ出来たことに安堵したのではない。ホットケーキを知らない事実に驚愕したのだ。

「えつ……ホットケーキ知らないの？ パンケーキ知ってるに？」

「え？ あ、し、知ってる！ そんなもの知ってるに決まってるだろ……」

「じゃあ、どんなお菓子？」

「ほつと、温かい……ケーキ、だろ」

「まあ、間違いないけどさ」

「ほりみろー、ウチは何でも知ってるんだからな！」

明らかに動揺を隠せないマテイに対し、亞莉栖はついつい頬を緩める。ああ、娘が出来た父親の気持ちがよく分かる、とか考えながら何度も頷いた。

「あ！ お前ウチのこと馬鹿にしてるだろ！..」

「そんなことないよ。でもそつかー、マティはホットケーキ知らなかつたんだねー」

「知つてるって言つただろ」

「まあ、今度作つてあげるから、楽しみにしてよ」

亞莉栖の言葉に、少女は怒りうつとしていた態度を改めると急に大人しくなり、うん、と小さく頷いた。

しかし次の瞬間には、もう普段の小生意気な少女の顔へと一変し、ふんと鼻を鳴らして部屋の奥へと歩いていった。

その変わりよつの早さに唖然として立ちつくす亞莉栖。すると奥のテーブルから少女の声が響いた。

「そんなところで突つ立つてないで、わつわといひに来て」

言われ、そんな言葉遣いで呼ばなくて、と思いながらも亞莉栖は渋々歩いていく。

ランプに映し出されるテーブル上は、設計図のよつなものが描かれた紙やらペンなどで散らかっていた。が、その一箇所に目が奪われた亞莉栖はそこを凝視した。

「気づいたか、なかなか目がとこな」

「……いや、そんなこれ見よがしに置いてあつたら誰でも気づくつて」

「ま、そうだな」

間違いない、と続けながらマティは“それ”を手に取つた。

少女が手にしたのは、綺麗な装飾が施された鞘に収まるナイフだった。しかし長さが刃渡り三十センチ以上もあるうかといつ、ナイ

フにしてはいさか長大なサイズのものだ。

それをおもむろに抜き放つと、ランプにかざす様にして亞莉栖に見せる。

「どうだ？ 綺麗だ？」

「うん、ナイフって初めて見たけど……こんなに綺麗なんだね」

「ウチが作ったんだ、感謝しろよ」

少女の言葉も聞き流すほど、その美麗な銀線に心奪われた亞莉栖は、しばしボウとして見惚れた。

人を殺すための道具であるが、それ故に惹かれる魔性をそこに感じた。

マティは黒の国の戦闘要員である者たちの武器全てをここで作っている。いわばこの拷問部屋のような一室は、少女専用の工房でもあるのだ。

実質いままともに戦えるのは、グリムとマティしかいないのだが、面倒ごとの嫌いな少女はあまり外へ出る」ではない。

「ふむ、まあお前なら使いこなせるだろ」

「……は？」

亞莉栖は弾かれるよつに疑問の声と同時に振り向いた。  
ナイフを指差し驚愕を顔に写し出すと、

「まさか、それがわたしの武器？」

「そ、これがお前の武器。あ、ちなみにウチの武器はこのグローブ。どうだ、カッ」「いいだろ？」

ガシャガシャと手を握つては開き、終いにはピースサインを形作るマティ。

「いや知らないけど、というかこんな『カイの扱えるわけないじゃない』

「リアクションが淡白すぎるや……。せっかく改造してカッチョよくなしたのに、これが解らんとば」

残念そうに首を振る少女は、元の大きさまで戻った機械式グローブを愛おしそうに撫でる。

「……まあそいつは持つてみてから言つんだな、きっと驚く」、そういう言つとマティはテーブルにナイフを置いた。

少女に促され、亞莉栖は試しにナイフを掴んでみた。そして持ち上げる。するとそのあまりの軽さに亞莉栖は目を瞠った。

「あれ、軽い。こんなに大きいのに？」

「ここじゃ不思議なのが当たり前だからな。疑問を持つという思考自体が意味を成さない。疲れるだけだよ、って猫が言つてたぞ」

「ああ、そんな台詞聞いたことがあるような気がするわ」

「ま、ヴォーパルが見つかるまでそいつで戦闘してくれ」

「わたしにこれ持つて戦えと？ あの化物たちと？？」

「そうだ、女王になりたいんだろ？ 戦う術はグリムにでも聞くんだな。ウチは適当に握り潰したり、オブション付けて切り裂いたりするだけだから楽だし、そもそもウチはあまり戦場には赴かないから問題ないけどさ、お前はうさぎ同様、前線で戦つてなんぼの職業だからな」

「いつからわたしは勇者になつたのよ……」

それに女王になりたいんじゃない、もとの世界に帰りたいだけ。呟いた言葉はマティには届かなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2736y/>

---

Alice of Black Blood

2011年11月30日18時48分発行